

第一 ねもきゆるはるのうすづき 音牙 春白月

## 団子売の段〈摘録〉

〈出典：「四ツ橋文楽座四月興行筋書」、昭和 25 年 4 月〉

江戸時代の市井風俗の一つとして、当時流行の物売りの風流洒脱の興味が俗曲に取り入れられたことは当然のことである。物売りの呼び声や、風俗に各々特色のあることは今日もその名残りをみる事が出来るが、当時の社会としてこれらは競って特異な風俗を持って居た。古く土佐とか半太夫とか云う古浄瑠璃にもこれが取材されて頗る流行したが、近松以降の浄瑠璃各流、或は長唄等に於て物売りの曲は所作事として極めて発達したのである。

古浄瑠璃に「花売り」「花火売り」「団扇売り」「扇売り」「破魔弓売り」「鶯売り」「絵草子売り」などの市井風俗が已に取り入れられて居り、歌舞伎狂言の中にも例の「白酒売り」「外郎売り」はじめ「葱売り」「虫売り」、その他所作事として取上げられたものは数知れずある。その中に「影勝団子」と云うのがある。夫婦の団子売が所作面白く口上を云い云てると云う踊りで、清元の玉兎もこの踊りに胚胎して居り、今回上演の「団子売り」はこの系統を引くものである。本文にある「飛び団子」と云うのは「影勝団子」の異名で、その口上など当時の市井スケッチであろうと思われる。

明治八年頃、名人の玉造が山村流某師匠の振附で之を演ったということを聞いているが、只今しているのは、明治三十?年頃御霊文楽座の伊賀越、新関の遠眼鏡から引抜いて演じたもので、文楽独特の振を拵え先代紋十郎、二代目玉助の二人が之を遣ったのである。太夫は染太夫に前の南部太夫、三味線三代目清六、二代目寛治郎、女夫の団子売で「雪か花かの上白米を痴話の手管で晒して挽いて、情で捏て丸めて、飛びだんご、ヤレモサヤレヤレさてな白と杵とは女夫でござる、……………二人立、〴お月様さへ嫁入なさる……………からは男の方の一人立、赤鉢巻に肌抜き素の振事、ここで俄然急調に一転して賑かな鳴物入りになり、女房の方が手拭を頭に、可笑しな恰好で高砂松を極めてユーモアに、極めて軽妙に踊り抜く、頗る野調に富んだものである。